



Title	「学校の安全・安心」に関する講義内容・方法の試論的検討
Author(s)	畑中, 大路; 柳川, 優希; 元兼, 正浩
Citation	長崎大学教育学部紀要, 4, p.61-72; 2018
Issue Date	2018-02-28
URL	http://hdl.handle.net/10069/38120
Right	

This document is downloaded at: 2019-06-16T18:54:12Z

「学校の安全・安心」に関する講義内容・方法の試論的検討

畑中 大路*・柳川 優希**・元兼 正浩***

An Essay on How to Teach "Risk and Crisis Management in School" in University Lectures

Taiji HATANAKA Yuki YANAGAWA Masahiro MOTOKANE

I. はじめに

長崎県の学校教育にとって、「学校の安全・安心」は欠かすことのできない教育課題である。なぜなら長崎ではこれまで、長崎男児誘拐殺人事件（2003年）や佐世保小6女児同級生殺害事件（2004年）、佐世保女子高生殺害事件（2014年）に代表されるように、児童生徒をめぐる痛ましい事件が頻発しており、その対応が求められているからである。長崎県教育委員会による『心を育てる道徳教材集』（平成17年3月）の作成をはじめとする道徳教育の充実や、「命を大切に作る心や思いやりの心の育成」等を目的とした「長崎っ子の心を見つめる教育週間」（毎年5～7月に各学校が設定した日程で実施）の設定はその具体的取組の一つである。

もちろん、「学校の安全・安心」は長崎県のみが抱える教育課題ではない。当該事項をめぐるのは、大阪教育大学附属池田小学校の不審者侵入事件（2001年）、東日本大震災における津波からの避難・引き渡し（2011年）等の事件・災害に留まらず、給食における食中毒や教職員の不祥事、授業中の事故、部活動における体罰など、その視野を広げると多数の事項を挙げることができる。それゆえ「学校の安全・安心」は教員養成を含む教師教育において必修の事項といえるが、当該事項の守備範囲の広さゆえ、その講義内容・方法の検討は十分になされてこなかった。

そこで本稿では「大学講義等において「学校の安全・安心」をいかに取り扱うか」をテーマとし、その講義内容・方法について試論的に検討する。具体的には、長崎大学教育学部で開講された「学校教育危機管理論」（2017年度前期集中講義、担当：元兼正浩）の講義内容を踏まえ（Ⅱ節）、受講者の学びの軌跡の分析を通じ（Ⅲ節）、上記課題の検討を行いたい。

なお、「Ⅰ. はじめに」と「Ⅲ. 考察」を畑中が、「Ⅱ. 授業の概要」を柳川が執筆し、畑中・柳川・元兼により内容を検討した。

Ⅱ. 授業の概要

本稿が分析対象とする「学校教育危機管理論」は2017年度夏季集中講義として開講された学部3・4年生対象の講義科目である。講義担当者（元兼）は学校危機管理に関する多

*長崎大学大学院教育学研究科 **長崎大学大学院教育学研究科教職実践専攻

***九州大学大学院人間環境学研究院

くの業績を持ち、全国各地で実施される教員研修も多数担当している。以下ではまず、当講義の内容をおさえない。

2017年8月21日から4日間に渡り開講された全15回の講義の授業概要を表1に示す。全15回の講義のうち、4・5講目は長崎市立A中学校にてフィールドワークが実施された。それ以外の講義は、長崎大学教育学部講義室での実施である。授業では、ケースメソッドやスクリプトを使用したロールプレイなどの教育方法が活用された。各回の終了時には、学生にミニレポート（感想等の記入）が課された。ミニレポートは、全15回の講義終了時にポートフォリオとして集約され、学生のメタ評価が図られた（図1）。

表1 2017年度前期集中講義「学校教育危機管理論」の授業概要

講	日付	時限	授 業 内 容
1	8月21日	3	学校安全の定義、学校の取組（学校安全計画の作成、セーフティプロモーションスクール、非構造部材の耐震化）、避難所としての学校、ミニレポート記入
2		4	通学路の安全と安心（集団登校の安全性・危険性、通学時の責任の所在）、部活動（柔道事故）、不審者侵入、CAP（Child Assault Prevention）、ミニレポート記入
3		5	ケースメソッド（避難所運営）、避難所としての学校、ミニレポート記入
4	8月22日	1	長崎市立A中学校訪問（施設見学、質疑）
5		2	
6		3	学校訪問の振り返り、学校掃除への問い、学校トイレの問題点、リスク回避戦略としての学校トイレ、ミニレポート記入
7		4	ケースメソッド（水泳事故対応）、リスクとしての運動会、ミニレポート記入
8		5	東日本大震災時の学校、防災教育の考え方、ミニレポート記入
9	8月23日	1	コンプライアンスと法令順守、教員の処分、教職員の不祥事（教員免許状の失効、暴力、パワハラ）、ミニレポート記入
10		2	スクールセクハラ、教員の働き方改革問題、部活動問題、いじめの四者構造論とスクールカースト、ミニレポート記入
11		3	ケースメソッド（部活動体罰への対応）、スクールアイデンティティと部活動、生徒指導と部活動、ミニレポート記入
12		4	保護者クレーム対応、ロールプレイ（教頭と保護者、教頭と担任、教頭と担任と保護者）、ミニレポート記入
13		5	クライシス・コミュニケーション、ケースメソッド（いじめ、出会い系、不登校）、危機管理論のパラドクス、ミニレポート記入
14	8月24日	1	スマートフォントラブル、子どもの貧困、LGBT、学校統廃合、シンギュラリティ、ミニレポート記入
15		2	危機対応から危機管理へ、リスク・マネジメントとクライシス・マネジメント、リーガルチェック、クレーム対応、マスコミ対応、ミニレポート記入、ポートフォリオ作成

第1講：8月21日（12:50～14:20）

「安全と安心の違い」や「安全を追求することが善か」ということについて考えた。学生同士でペアをつくり、学校の安全には何が必要か、キーワードを書き出し、それぞれが学校安全の定義を考えた。例として、戸田（2012）の定義を引用し、学校安全の要点が示された。

講義日	議題	議題	議題	議題
8/21 (日)				

図1 ポートフォリオ

「学校保健安全法」や「学校安全の推進に関する計画の策定について（答申）」（平成24年3月）を示し、学校安全計画の作成について説明された。また、「学校保健法」から「学校保健安全法」へ改正された背景に、大阪教育大学附属池田小学校における児童殺傷事件（2001年6月）があることを取り上げた。学校安全に関する他の取り組みとして、ISS(International Safe Schools)やSPS(Safety Promotion Schools, 防災・減災教育モデル校)が紹介された。他にも、長崎県の学校（非構造部材）耐震化率が全国平均より低いことを例に挙げ、翌日の学校訪問時の視点につなげた。

熊本地震によって熊本県益城町の体育館の屋根が崩れ落ちた写真を示し、避難場所として学校の体育館が相応しいか考えた。熊本地震の特徴である「軒先避難」「車中避難」の問題点について話し合った。他にも、「避難所としての学校」と「学校統廃合」や「なぜ地域の方は公民館ではなく学校に来たがるのか」について考えた。

授業の最後には、ポートフォリオとミニレポートについての説明があった。

第2講：8月21日（14:30～16:00）

登下校時の通学路の安全と安心について考えた。ドライバーとのトラブル回避や、学校統廃合の問題への対応として、定時に自動昇降する車止めを試験的に導入した地域を紹介した。その他にも、ガードレールと道幅や、自転車通学とヘルメットなど様々な内容を提示した。交通安全以外にも、変質者や不審者による被害の防止、低学年の児童の引率等を目的として行われる「集団登校」が取り上げられた。果たして「集団下校」は安全なのかについて、活発な議論が行われた。また、登下校時の責任の所在についても、学校と保護者の両立場から考えた。

次に、「中学（高校）における主要部活動の死亡率」や新聞記事の引用から、柔道事故と2012年の武道の必修化の流れについて考えた。部活動でさえ死亡率が高く、半身不随や麻痺まで含めると相当数にのぼるなど、柔道の危険性の理解が図られた。なぜ柔道が武道の授業で選ばれるのか考えながら、代替案についても検討した。

その他にも、校庭の危険箇所としてサッカーゴールの問題が挙げられたり、校内への不審者侵入時のさすまの有効性について疑問提起されたりした。子ども自身のエンパワメントに着目したCAP(Child Assault Prevention, 子どもへの暴力防止プログラム)も紹介された。

第3講：8月21日 (16:10~17:40)

4人程度のグループに分かれて、ケースメソッドが実施された(図2)。ケースの内容は避難所運営である⁽¹⁾。個人で対応を考えたのち、グループでホワイトボードシートに意見を書き出し、各グループが発表を行った。



図2 ケースメソッドの様子

ケースメソッドを踏まえ、避難所運営で起こりがちな問題として、物資の不足や防災倉庫の鍵の管理、プライバシー、ペット等の問題を挙げた。また、防災教育として避難所運営ゲーム「HUG」等の「防災ゲーム」の活用が紹介された。

第4・5講：8月22日 (8:50~12:00)

長崎市立A中学校にてフィールドワークが実施された(図3)。創立70周年を迎える校舎は、現代化が図られた部分と設立時のままの部分とが共存しており、それぞれの学生が様々な気づきを得ていた。施設見学の後は当該校の校長・教頭に対して、気になった点などの質問を行った。



図3 学校訪問の様子

第6講：8月22日 (12:50~14:20)

大学に戻り、施設見学で得た気づきや疑問をさらに広げ深めた。設備に関連した時事として、2017年6月に起きた下半身不随の乗客が航空会社に搭乗拒否をされた事件を取り上げた。障害者権利条約の観点や合理的配慮、ユニバーサルデザインの視点から、さらに振り返りが行われた。

次に、日本の学校掃除について考えた。世界の学校文化と比較しながら、日本の学校掃除は教育なのか、それとも児童労働かについて考えた。学校マネジメントとして、トイレの大幅改修を行った滋賀県の事例が紹介され、施設の清潔さと心理的状态の関係性から学校掃除や学校トイレについてさらに考えた。また、全男子トイレが個室洋式化された新聞記事から、視点をハード面からソフト面に変えて学校トイレの問題を考えた。

第7講：8月22日 (14:30~16:00)

スポーツ庁が示した危険な飛び込みの例の図や、学校内のプールで起きた過去の死亡事故の例を見ながら、リスクとしての学校プールについて考えた。学校にプールが設置された理由を戦後まで遡りながら理解し、プールを維持するコストや水質管理等の運営方法にも触れながら、現代の学校でプールを行う意義を考えた。その後、2~3人程度に分かれてケースメソッドを行った。ケースの内容は、水泳事故対応である。

次に、組体操のピラミッドの事故を挙げながら、リスクとしての運動会について考えた。最近の傾向として、単にピラミッドをやるかやらないかの議論になっていることが挙げら

れた。それに対し、例えばピラミッドの段数を減らすなど減災の考え方の適用ができないか考えた。ピラミッドだけでなく、騎馬戦やムカデ競争における事故についても取り上げられ、花形競技がなくなるのではないかと、競争のない運動会になるのではないかとといった議論が生まれた。

第8講：8月22日（16:10～17:40）

津波で児童74名、教職員10名が亡くなった石巻市立大川小学校の事例を挙げながら、緊急事態に見舞われた学校現場について考えた。教職員と遺族のそれぞれの立場から、訴訟の争点を分析した。ダークツーリズム（被災地観光）の後ろめたさと、災害の記憶を伝承する意味とを考えながら、震災遺構の整備について取り上げられた。東日本に比べ、実感の湧きにくい地方の高校が、修学旅行先に東北を設定するなど、生きた教材としての活用例が示された。その一つとして、福岡県立修猷館高校の例を挙げ、「震災・復興に関わる様々な研修を現地に赴き行うことで、危機管理について学び、将来の日本を背負う、『世のため人のため』に尽くせる人材となるための自覚と使命を得る機会とする」として希望制で東北研修旅行を実施していることを取り上げた。広島原爆ドームや長崎の被爆者と同様に、震災の記憶の伝承していくことの重要性について考えた。

東日本大震災の経験が熊本地震に生かされていないことが、そして、熊本地震の経験が他の地域で生かされていないことを問題提起し、今後の防災教育のあり方について考えた。

第9講：8月23日（8:50～10:20）

法令順守とコンプライアンスの違いを、法と倫理の違いに関連付けて考えた。教科書会社の謝礼問題を例に、教職員の法令順守感覚の鈍さを指摘した新聞記事を取り上げた。法律違反ではないものの、教科書としての多様性が失われ、感覚の鈍さが大きな危機を招き得ることを訴えた。

教職員の主な処分の状況として、スクールセクハラや交通事故が多いことに触れた。そのような不祥事を起こした教職員の処分について、懲戒処分と分限処分、訓告処分、懲戒免職、諭旨免職等の説明がされた。

具体的な不祥事の例として、体罰、パワハラがまず挙げられた。2012年の大阪市立桜宮高校での体罰事件を境に、教職員の処分件数は増加している。この一つの要因は、スマートフォン等によって体罰の現場を動画等で押さえられることであるとした。そして、なぜ部活動で体罰が起りやすいか、部活動の特殊性に着目しながら考えた。教室における体罰については、昭和60年代の管理教育に遡り、懲戒との線引きの難しさに触れながら考えた。

第10講：8月23日（10:30～11:50）

上記以外の教職員不祥事として、スクールセクハラが取り上げられた。学園ドラマ等で教師と生徒の恋愛が描かれることの影響が挙げられた。また、SNSの利用によっても、スクールセクハラは起きやすくなっており、教員のコンプライアンスの問題が深刻化していることについて考えた。

OECD 諸国の「国際教員指導環境調査 TALIS」のデータが示され、日本の教員の労働時間の長さを取り上げ、教員の働き方改革問題について考えた。他国と比べて持ち授業時数はそれほど多くないことから、部活動指導の問題の大きさが指摘された。部活動の顧問不足問題に関する映像を参照しながら、今後の部活動のあり方について考えた。

いじめの認知件数に地域格差があることを取り上げた新聞記事を読んだ。認知件数は、あくまでも氷山の一角であり、増えているか減っているかはわからないと指摘された。いじめゼロを目指すのではなく、いじめの認知漏れゼロを目指すべきだとされた。いじめを先導者や傍観者、被害者、加害者といった四者構造論の視点から考えた。さらに、スクールカーストの視点から、どういった子がカーストの上位にいるのか、評価の物差しは何かを考えた。

第11講：8月23日 (12:50~14:20)

2~3人程度に分かれてケースメソッドを行った。ケースの内容は、部活動における体罰である。個人で対応を考えたのち、グループで話し合い、全体に向けて発表した。

ケースメソッドを受けて、問題にどのように対応するかを考えた。また、体罰が起きた背景として、勝利至上主義的な雰囲気になかったか、学校側からの顧問教員に対するプレッシャーがなかったかなどが問われた。部活動がスクールアイデンティティとして戦略的に使われることがあり、校内で部活動の教員が権力をもっていく構造を取り上げた。

生徒指導として部活動が使われることを挙げて、子どもの反社会的行動やストレスの問題への対応について考えた。

第12講：8月23日 (14:30~16:00)

学校では、保護者クレームに関する情報の蓄積がされないことや、たまたま電話を取った教職員が学校を代表してしまう問題を挙げた。今後はネゴシエーターとして、ビジネスコミュニケーションの必要性が指摘された。

保護者対応に関するスクリプトを用い、ロールプレイが行われた(図4)。学生はそれぞれ、保護者役と教頭役、教頭役と担任役になり、互いの対応を指摘しあう活動が実施された。

第13講：8月23日 (16:10~17:40)

前時のロールプレイを振り返り、クライシス・コミュニケーションの重要性を再認識した。マスコミ対応についても、真摯なコミュニケーションをとる姿勢の重要性が確認された。コミュニケーション学として、アルバート・メラビアンの法則が挙げられた。適切・迅速な対応のための重要ポイント10か条(高階2001)が引用された。

演習課題として、いじめ、出会い系、不登校の問題がケースとして示され、それらにどのように対応するか、個人で考えた。



図4 ロールプレイの様子

トップダウン型階層組織（官僚組織）において、トップの賢明さや盲目的服従などの問題点が挙げられた。教職員の意識をどう高められるか、リスクの感度をいかに上げるかが問われた。地下鉄サリン事件時の聖路加国際病院の組織対応が取り上げられ、学校組織に比較の目が向けられた。

第14講 8月24日（8:50～10:20）

スマートフォントラブルについての新聞記事が挙げられ、どこまで学校が教育するべきか、いつ行うべきなのか、誰がどう教育するべきのかなどが問われた。

不登校問題を取り上げ、不登校児の親は義務教育違反と言えるのかを考えた。フリースクールやICTを活用した学習活動を出席に数えることで、不登校に当てはまる子どもの数を減らしていく動きが取り上げられた。

子どもの貧困問題についても取り上げられ、人と人のつながりが切れることの危険性が指摘された。義務教育は無償であるが、実際には制服や修学旅行、補助教材等の負担が学力や孤立の問題を生じさせていることについて考えた。

第15講：8月24日（10:30～11:50）

危機対応から危機管理への転換点として、阪神淡路大震災や地下鉄サリン事件、O-157、雪印、BSEなどの種々の事件の存在があったことを振り返り、危機管理も質的变化が求められていることが確認された。危機に陥らないための予防であるリスク・マネジメントと、危機に陥ったあとの迅速な対応であるクライシス・マネジメントの説明がなされた。リスク・マネジメントに重点を置きすぎると、限られた人的資源である教職員を、リスクの予防のために翻弄させ、疲弊させてしまう危険性があると指摘した。また、外部の目を活用したリーガルチェックの必要性や、子どもたち自身の危機管理能力の育成についても考えた。

全15回の講義の振り返りによって、メタ認知が促された。

Ⅲ. 考 察

本稿冒頭で述べたように、「学校の安全・安心」の守備範囲は広い。それゆえ、Ⅱ節で整理した元兼氏による講義は、受講生が持つ「学校の安全・安心」概念の拡張をねらいとして展開されたものであったといえる。

以下ではこのねらいが達成されたかどうか、そして達成されたのであればその要因は何であるのかについて、受講生のポートフォリオを用い、講義内容と講義方法の観点から試論的に検討したい。

1. 講義内容

本講義は教職経験のない大学生を対象としたものであるため、受講生が当初持ちえていた「学校の安全・安心」に関する知識は限られたものであったと推察される。しかし、受講生はⅡ節で詳述した15回の講義を経るにつれ、「学校の安全・安心」に関する多様な知識を身につけたことがポートフォリオから伺えた。当該ポートフォリオに記載された危機管理に関するキーワードを抽出し⁽²⁾、そのキーワード数の増加の様子を示したものを表

2, 図5に示す。

表2 ポートフォリオに記載された危機管理に関するキーワード

1講目 保護者 地域 安全 安心 体育館 災害 天井 プライバシー 学校再開 ルール セーフティプロモーション 見た目 2講目 通学路 登下校 連携 責任 武道 柔道 防犯 サッカーゴール 不審者 さすまた 人権意識 規範意識 体験 休み時間 3講目 避難所 防災訓練 防災グッズ 自己管理能力	4・5講目 防犯カメラ 情報流出 くもりガラス コスト トイレ 受付 救助袋 工夫 増改築 段差 校舎 校内設備 対策 備蓄庫 6講目 掃除 家庭 7講目 体罰 運動会 組体操 騎馬戦 ケガ 達成感 順位 競争 写真撮影 ブール 8講目 マニュアル 津波 避難所運営	遺構 経験 震災 被災 時間 伝統 判断 納得 リスク キャッチフレーズ 9講目 バウハラ セクハラ 懲戒 不祥事 スクールカースト カリスマ性 法令 処分 謝礼 信頼関係 いじめ 10講目 長時間労働 部活動 11講目 管理教育 非行 校則 生徒理解 12講目 調停 担任	管理職 クレーム 作戦会議 13講目 避難指示 危機予測 相談 報告 謝罪会見 トラブル 対応 コミュニケーション 有事 再発防止 14講目 不登校 中1ギャップ 学力 進路 LGBT 貧困 マナー スマートフォン 情報リテラシー 15講目 事故 PDCA サイクル 報道 環境 危機感 ひとごと
--	---	---	---

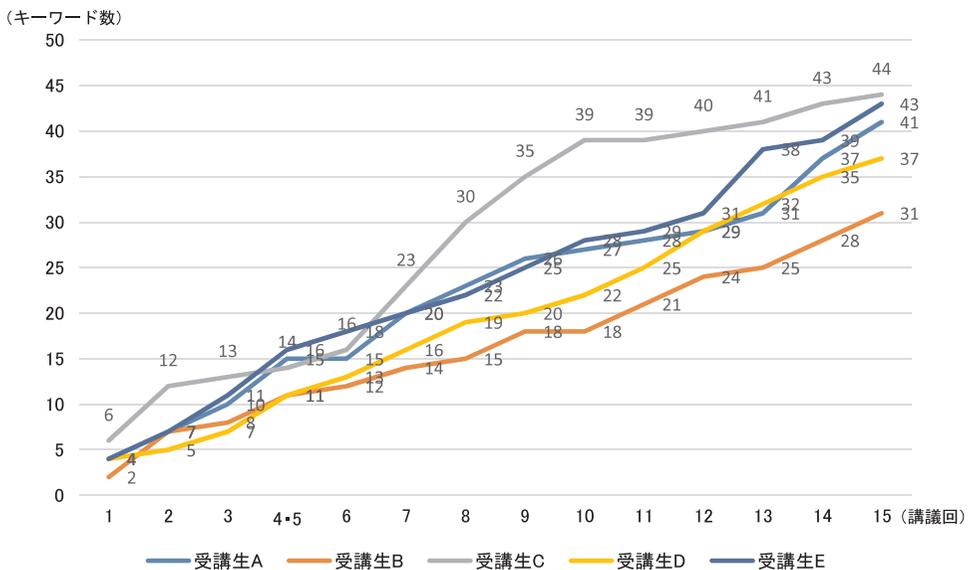


図5 危機管理に関するキーワード出現数の変容

講義開始当初、ポートフォリオへ記載されたキーワードは「安全」「安心」などの抽象的なものであった。しかし、講義を経るにつれ、「運動会」や「武道」といった教育課程における危機、「部活動」や「登下校」といった教育課程外・学校外における危機、「貧困」や「LGBT」といった近年の社会状況を反映した危機と、「学校の安全・安心」に関する概念が広がりつつある様子が読み取れる。

また同時に、講義を経るにつれ、「学校の安全・安心」に関する主体・対象も多様になりつつある。具体的には、ポートフォリオに記載されたキーワードが、「登下校」といった子どもを対象とした危機から、「避難所運営」や「クレーム」といった地域や保護者に関する危機、「不祥事対応」や「体罰」といった教職員に関する危機などに拡張している。

2. 講義方法

危機管理では「想定外を想定する」ことが求められる（畑中2011）。一方、本講義は先述のように、教職経験のない学生を対象としたものであるため、「想定外」の想定は非常に困難であり、その点を考慮した講義方法が求められた。そこで本講義では、①学校訪問による施設見学、②ケースメソッド、③ロールプレイといった教育方法を活用し、受講生の「想定外」の拡充を目指した。

①学校訪問

学校訪問を行うに当たって、本講義窓口である筆者（畑中）は事前に長崎市教育委員会担当者へ当該講義のねらいを説明し、訪問校の紹介を受けた。学校訪問においては、施設見学と合わせ、校長・教頭による危機管理に関する説明と質疑応答の時間が設けられた。この学校訪問は受講生にとって「学校の安全・安心」をより具体的に捉える契機となったことが下記記述からも窺える。

生徒でもなく教師からでもない立場で学校に行くのは初めてだったので、立場を変えるだけでこんなにも見え方が違うのだなと思いました。そして、防犯や学校の建物を改めてよく見る機会もあまりなかったので新鮮でした。よくよく見てみると、やはり古い校舎は増改築などで段差が多かったり、昔のつくりで中が見えにくかったりと、今の状況にはそぐわない部分もありました。（受講生Dの4・5講目感想。下線は筆者。）

実際に学校に足を運んで校内設備を見てみると、ちゃんと対策できている箇所、注意が行き届いていない箇所があり、リスク・マネジメントの途中であることが分かった。おそらくこれはこの学校が特別ではないだろう。学校の対応もかなり意欲的にいじめや災害などの対策を行っているが、備蓄庫がなかったりという課題が残っているように感じた。しかし、学校側も危機が発生することへの対策を重視しているのが感じられた。（受講生Eの4・5講目感想。下線は筆者。）

②ケースメソッド

ケースメソッドとは、ハーバード大学のビジネススクール（MBA）などで盛んに行われている講義方法であり、近年では教員研修等でも多用されている。ケースメソッドでは

ケースについて問題分析するばかりでなく、当事者の立場で意思決定を行うことに特徴がある。例えばMBAでは2年間に300もの事例について問題分析して意思決定を行い、それについてグループ討議、さらに全体討議を行っており、この討議の過程を通じて持論を修正したり強化したりすることが可能になるという（日本教育経営学会実践推進委員会編2014）。本講義では「学校の安全・安心」に関するケースメソッドを行い、いくつかの危機を疑似体験した。

例えば、3講目では「避難所運営における意思決定」について当事者の視点で考察することにより、想定すべき危機の範囲の広さを体感できたようである。

体育館が避難所となることは知っていたが、その中での教員の役割などは考えたこともなかった。それ以外にも普段は考えないような、答えが簡単にはないような問題が多かった。(受講生Bの3講目感想。下線は筆者。)

実際に被災した場合、マニュアルどおりの対応ができるとは限らないので、事前の対策というのは徹底すべきだと感じた。思った以上に危機が多かったので、自分の管理能力と照らし合わせて見直しておきたい。(受講生Eの3校目感想、下線は筆者。)

③ロールプレイ

本講義では保護者等とのディスコミュニケーションによって生じた危機対応についても考察している。ここで用いたのがロールプレイであった。受講生はケースメソッド同様、ロールプレイによる疑似体験を通じ、対応の難しさや重要性を考察している。

ロールプレイを通して人に寄り添うことが苦手だと分かった。ワンクッションおいて言い訳を聞きつつ、焦点を見失わずにしゃべる段取りが下手だったので気を付けたい。起きてしまったことではなく、今後の見通しについて建設的な話を展開していく方に導くロールプレイを目指したい。(受講生Aの12講目感想。下線は筆者。)

管理職、調停者の大変さがよく分かりました。言葉を選びつつ、話をヒートアップさせることなくまとめて行かなければならないのは難しかったです。担任との作戦会議が重要なこともわかりました。言葉上わかかっていてもロールプレイングしないと分からなかったこともあったので経験できてとてもよかったです。(受講生Dの12講目感想。下線は筆者。)

上述のような学校訪問、ケースメソッド、ロールプレイを講義にバランスよく配置することで、受講生が抱く「学校の安全・安心」概念が拡張したことが、受講生による講義振り返りからも読み取ることができる。

今回の集中講義全体を振り返って、一番思ったことは、普段考えていなかった危機や危険がたくさんあるということです。震災が起き、避難所として一番活用されるのは学校や体育館であるが、そこは実際に安全であるのか?といったことや、対応の仕方についてなど、被災者の一人である教師の対応であったり、あってから考えるのではなく、事前に考

えることが本当に大切であることが分かりました。(中略) クレーム対応についても、テレビで見ている謝罪のようなものはだいたい失敗して倒産してしまう会社があったりするけれど、対応の順序や仕方を考えておくことで、迅速かつ納得のいく対応をすることができるようになることも分かりました。実際に学校見学に行くことで現場の様子を一部だけでも知ることができました。伝統ある校舎でどのような改善や工夫をすることで子どもたちが安全に安心して過ごせるようになるものかということがたくさん考えられていることも知ることが出来ました。(受講生Cの講義振り返りの記述。下線は筆者。)

同様の振り返りは他の受講生においても確認された。

以上、受講生のポートフォリオを用いた試論的考察を通じ、受講生が抱く「学校の安全・安心」概念は講義を通じておおむね拡張しており、その拡張を助ける手段として、学校訪問やケースメソッド、ロールプレイといった講義方法が有効であることが窺えた。

IV. おわりに

本稿では、「大学講義等において「学校の安全・安心」をいかに取り扱うか」を試論的に検討した。講義内容の整理とその結果の分析を踏まえるならば、学校訪問やケースメソッド、ロールプレイ等を用いた講義方法が有効に働き、受講生が抱く「学校の安全・安心」概念が拡張した様子を読み取ることができた。

「学校の安全・安心」に関しては、「想定外を想定する」という困難な作業が求められるため、それをいかにして行うかといった検討は未だ不十分である。しかし昨今の学校を取り巻く急速な環境変化や社会状況を踏まえるならば、今後当該内容の検討は喫緊の課題となりうるであろう。今回は大学講義を対象として検討を行ったが、今後は現職教員を対象とする教員研修や教職大学院における講義等において、いかなる内容・方法を取るべきなのか、継続した検討が求められる。

【注】

- (1) 使用したケースは、九州大学・熊本市教育センター（2017）所収「教務主任が避難所運営をリードしてほしい」である。当ケースは、深夜に起きた大地震をうけ地域住民等が学校に避難する中、学校に駆けつけた数名の教員が避難所運営計画を立てるという内容である。なお、当該ケースメソッドは下記ホームページからも閲覧可能である。<http://www.education.kyushu-u.ac.jp/~schoolleaders/~middle/home>
- (2) 本キーワードは、受講生5名のポートフォリオから畑中が抽出したものである。

【参考文献】

- ・ 高階玲治編著（2001）『見てわかる学校の危機管理マニュアル』東洋館出版社。
- ・ 戸田芳雄編著（2012）『学校・子どもの安全と危機管理』少年写真新聞社。
- ・ 畑村洋太郎（2011）『「想定外」を想定せよ！失敗学からの提言』NHK 出版。
- ・ 九州大学・熊本市教育センター（2017）『ミドルリーダー研修コンテンツ開発トライアル』。
- ・ 日本教育経営学会実践推進委員会編（2014）『次世代スクールリーダーのためのケー

スメソッド入門』花書院。

- ・ 福岡県教育センター・九州大学 (2009) 『危機管理講座テキスト』。